

保育はみんなできつくるもの

—ある日の登園から—

西隆太郎

(大学教員)

娘の遥は、保育園の二歳児クラスに通っている。平日たまに時間がとれたときは、私も遥を保育園に連れていく。普段は仕事で保育園にお邪魔することも多いが、保護者として園を訪れるときにも、あらためて保育の大事なことを感じさせられるように思う。

ある冬の日。まだ家で遊びたそうな遥を、抱っこで誘う。靴を履き、手をひいて扉を開けると、外には雪がちらほらと舞っている。

「見て！ 雪だよ」

「うん！ ゆーきー！」

その一瞬で遥の気持ちも高まり、にこにこと一緒に歩いていく。

いつもの曲がり角には、おじいさんが佇み、「おはようさん」と満面の笑顔で声をかけてくださる。

「おはようございます！ はるちゃん、おはようって」

照れてしまつてなかなか言えないようだったが、きつとうれしかったに違いない。いつもこの角で道行く人を見守ってくれているおじいさんだが、どれだけかこの街を支えてくれているだろう、と思う。

保育園は幸運にも家の近所で、歩いて通いやすい距離にある。通りを渡ってお地藏さんに挨拶すると、そこからはもうすぐだ。

二歳児クラスへと向かって廊下を歩くと、「あ、はるちゃん来た！ はるちゃん来た！」と、ぴよんぴよんはしゃいでくれる女の子。

先生方は子どもたちとかかわりつつも、私たちを笑顔で迎えてくださる。私が服を用意したり、一日の支度を始めると、背中に「どーん！」と遙が乗っかって甘える。すると、廊下の向こうから男の子が一直線にやって来て、遙の周りをくるくる駆けて、まるで飛行機が急旋回するように、廊下の向こうへ飛んでいく。向こうへ行ったかと思うとまた駆けてきて、遙を軌道の中心のようにして、楽しげな笑顔で何度も大きな弧を描く。その子に「おはよう」と声をかけたところで「おはよう」と型通りに言葉で返すわけではないが、それ以上私たちを歓迎してくれているのだと思う。

先生がギターを手にして歌い始めた。それが聞こえてくるなり、遙はすつと私のそばを離れ、椅子に座ってみんなと一緒に聴き始めた。以前のようにもうちよつと私に甘えていてほしかった気もするが、このごろはこんな様子も出てきたように思う。

もちろん保育園の朝はにぎやかで、こんなひとときも、いろんなことが目まぐるしく行き交い、子どもたちと入れ替わり立ち替わり出会う中で、生まれているのである。今日のように、ボタンの掛け違いもなく、うれしいことがとんとん拍子に積み重なっていく日もあるが、そうでもないことも数多くある。それこそ、遙がコートのボタンを一番上から一番下まできっちり自分で留めたいのになかなかうまくいかなくて……といったことが重なり、ぐずぐずすることもある。

準備を終えると、私も保育園を出ていくことになるが、廊下でそっけなく別れるよりは、遙の手をとっていったん部屋の中に入っていくことが多い。朝、みんなが自由に遊んでいる中にすんなり入っていく子もいると思うが、遙の場合は、少しゆっくりと自分なりに様子を見てから、ということも多いように思う。

ふと気づくと、遙が絵本のコーナーで、M君と寄り添って静かに絵本を読んでいる。隣同士落ち着いた安心感が漂う中に、男親としては、M君、迎えてくれてありがとう、という気持ちもあれば、どこかしら複雑な気持ちにもなるのだが……。

去り際が難しく、なかなか私の腕を離れないときもある。先生はみんなの遊びの中に入りながらも、私たちの様子をよく見てくれていて、ちょうどいい頃合いを見てそっと手を伸ばしてくれる。先生に一对一で抱っこされ、昨日のことなど話しながら、遙も少しずつ安

心して園での生活に入っていく。私も、先生が遙を優しく抱きとめてくださったことで、「はるちゃん、行ってくるよ」と言える。

私たちばかりでなく、どの子も、どの保護者も、一つ一つ心動かされながら、新しい一日へと向かっていく。登園のひとときは、そんな時間である。

登園時の保育を考えると、挨拶を習慣づけるとか、的確な言葉掛けで保育に導入していくとか、そんな保育士の「専門性」や「スキル」が語られることも多いようだ。保育の実際がそう絵に描いたように進むとはとても思えないが、日常の一つ一つのことが大事だということだろう。ただ、「保育の対象」というよりも、人としての私たちにとっては、登園はそれ以上の意味を持っている。

ある一日、その子が世界に受け入れられていく時間。その子自身も、その日の世界を自

分の心の中に受け入れていく時間。短い時間ではあるけれど、子どもにとって世界への信頼は、こんな積み重ねからも築かれていくのだと感じられる。

その過程には、地域の人々も、共に育つ子どもたちも、かかわってくれている。誰か一人の大人が思いのままにコントロールするような体験ではない。保育はみんなのでつくるものだと思う。扉を開けて見つけた雪が心を明るくするように、思いがけない自然の変化も力になってくれる。大人があれこれ考えて言葉をかけるより、自然は一瞬で子どもたちの気持ちを更新してくれる。

時間も保育の味方になってくれる。今日、いろいろなうれしいことが重なったのは、ただの偶然というだけではなく、日々ここに通ってきた歳月や、冬になってクラスが成熟してきたことや、遥自身が大きくなってきたことなど、これまで過ごしてきた時間が与え

てくれたものでもあるだろう。その時間は、ずっと通ってきた保育園と先生方によって支えられてきた。友達が温かく迎えてくれるのも、クラス全体、園全体が支えられているからだと思う。大好きな先生と一緒に過ごした一年、一人ひとりを大切に見てくださった一年がある。保育はみんなのでつくるものだったのが、みんなの力が生きるように支えているのが、保育園であり、どの子のことも優しく受けとめてくださった先生方なのだと思う。

四月には、この乳児棟を卒業し、お隣にある幼児棟に移ることになる。行く手はるかな人生にとって、小さくて大きな一コマだ。新しいクラスに入って、私たちの心も今まで以上に動かされることと思うが、みんなが育ちゆく時間の中で、きつとこんなふうに幸せな場所になっていくのだろうと思う。